

『吾輩は猫である』の文明批評

——その未来記と『河童』および細君との関係——

米田利昭

一 『猫』の文明批評と未来記

『吾輩は猫である』（以下『猫』という）は、いうまでもなく「名前はまだない」という一匹の猫が、教師の家に住み着いて、そこで見聞するさまざまな出来事を語る仕組みになっている。それもはじめは書生という種族は、おさん（下女）というものは、人間というものは、書生一般、おさん一般、人間一般への批評だったが、他ならぬこの家の主人（これも始めは猫同様に名もない「主人」だったが、やがて苦沙弥と呼ばれるようになる）への批評となり、細君、子供達も批評の対象として登場する。猫の語る主人評はひっきりなしに漱石の自己批評だから、画とすれば戯画化された自画像から、〈画家の家族〉といった群像画となり、さらにこの家に入出入りする知識人たち、敵対する実業家たちも描きこまれ、広く日本社会の文明批評画集となる。

その文明批評の中には西洋に追いつこうとする日本の近代のひずみもあり、本家の西洋文明そのものの矛盾もあり、それらが日本だね、

西洋だね、稀には東洋だねの挿話を連ねて述べられるのが一回から十回に至る『猫』である。

特に『猫』最終回の第十一回は、これまでの主なる登場人物がすべて苦沙弥宅へ集まり、囲碁論と実に長々しい寒月のヴァイオリン始末談が終わると、ようやく寒月による結婚報知があり、これによって恋愛小説としての『猫』の終焉、つまり寒月と金田令嬢富子との恋愛などじつは始めから存在しなかったことが明らかとなるのだが、金田の方へは報知しなくともよろう、今ごろは探偵が知らせている、という話から、広く現代の文明論と共に、やがて未来はこうなるという未来記が展開される。

「二十世紀の人間は大抵探偵のようになる傾向があるが、どういう訳だろう」とまず問題が提起され、「個人の自覚心の強すぎるのが原因」と答えられる。

「今の人の自覚心というのは自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があるという事を知り過ぎているという事だ。そうしてこの自覚心

なるものは文明が進むに従つて一日々々と鋭敏になつて行くから、しまいには一挙手一投足も自然天然とは出来ないようになる。」

ヘンレーのスチーヴンソン評にある「瞬時も自己を忘るる事の出来ない人」とは今日の趨勢を言い表している、という。小説家漱石の既に描き、これから描こうとする人間たちがそうだ。『坊っちゃん』の坊っちゃん、『虞美人草』の甲野さん、小野さん、『三四郎』の三四郎、『それから』の代助、『門』の宗助らがこれだが、特に漱石文学も後半の『彼岸過迄』の須永、『行人』の一郎、『こゝろ』の先生、『明暗』の津田らは、みなへ自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があるという事を知り過ぎてゐるために天然自然と振る舞えない、へ瞬時も自己を忘れる事の出来ない人々たちだ。自分は隠して他人をそつと窺う人達である。処女作『猫』は、漱石のすべてを含んでいる。

「寐てもおれ、覚めてもおれ、このおれが至る所につけまつわつてゐるから、人間の行為言動が人工的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、世の中が苦しくなるばかり、」だという。親切をするにも、自覚心があるだけに骨が折れる。「こんな自覚心が強くて、どうしておだやかになれるものか。」四つに組んだ力士と同じで「非常に苦しい」。

「とにかくこの勢いで文明が進んで行つた日にや僕は生きてゐるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮は入らないから死ぬさ」と迷亭が言下に道破する。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を張る。

こんなユーモラスなやりとりを交えて小説は進むが、「どうせ死ぬな

ら、どうして死んだらよからう。」自殺クラブが起こつて人々は斬新な自殺の方法を競い、どうしても死ねないよくよくの意気地なしは巡査が棍棒で撲殺して、死骸も車を引いて拾つて歩く、という。近未来に起こりそうな事を、漱石は九十年前の明治三十九年に想像した。

また、「昔は御上の御威光なら何でも出来た時代」「次には御上の御威光でも出来ないものが出来てくる時代」今は「御上の御威光だから出来ないのだという新現象のあらわれる時代」だという。個人の人格の向上によつて社会的権威が失墜する結果で、これなど、まさに今日の世の中を予言したものだろう。

こうして迷亭、独仙が競つて未来記を語りだす。次には「結婚の不可能」。個人が強くなつて、人と人との間に空間がなくなつて、窮屈になる、余裕を求める、親子別居の次は夫婦が分かれる。昔なら異体同心だが、

「今はそうは行かないやね。夫はあくまでも夫で妻はどうしたつて妻だからね。その妻が女学校で行燈袴を穿いて牢平たる個性を鍛え上げて、束髪姿で乗り込んでくるんだから、とても夫の思う通りになる訳がない。また夫の思い通りになるようなら妻じゃない人形だからね。賢夫人になればなるほど個性は凄いいほど発達する。発達すればするほど夫と合わなくなる。合わなければ自然の勢夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結構な事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方とも苦しみの程度が増してくる。」

だから、別かれる、という。すると聞いていたトリックスター役の新

体詩人の東風がいう、「全然反対です」、愛と美、夫婦と芸術は不滅です。と。しかし迷亭は、「芸術だって夫婦と同じ運命に帰着するのさ」、個性の自由とは、おれはおれ、人は人だから、「人の作った詩文などは一面向白くないのさ。」だから芸術なんか成立しない、という。これも今日の趨勢だろう。人は紀伊国屋や三省堂などの大きな本屋へ行き、氾濫する本を見ると全くばかしく虚しくなるだろうから。

最後に独仙が、「個性の自由」がお互いの間を窮屈にする、ニーチェの超人も不平の声だ、英雄なんか出やしない、「今は孔子が幾人もいる。ことによると天下が悉く孔子かも知れない。だからおれは孔子だ」と威張つても庄が利かない。「吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。」という。

その個人そのものだって「個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、始末がつかなくな」る、というのが結論である。

以上の未来記、自殺クラブの盛行や巡査が人民を撲殺して歩くことや、おかみの権威の失墜や、結婚も、芸術も成り立たず、英雄も不在、みんな神経衰弱になるなどが、理屈として述べられた。個人の自覚心、個性の発達、自由など言葉はいろいろだが、要するに個人が強くなる事によって、そうなる、と。これまでの社会、家庭、文化など各方面の秩序が成り立たなくなり、世の中が内部から崩壊し、個人も滅びる、と未来の予想が述べられた。

個性の自由は、西洋がもたらした文明の恩恵で、それこそ社会発展のバロメーターと見られるものだが、それが社会そのものを、個人をも破壊するというパラドックスの発見である。近代の終焉である。

これは小説だから言えたので、漱石は、後の講演「私の個人主義」ではこんな極端な事は言わなかった。第一に個性の発展を奨励し、つぎには他人の個性をも尊重せよといって、自由と義務とも言い替えたこの両者の間に、調和を提唱した。知的指導者としては当然だろう。もっとも『猫』執筆時には、のちに『道草』に描かれたように、細君との人間関係や係累との金銭関係に苦しんだので、ああも想像が飛翔したのかもしれない。

とにかく、漱石はここで、『三四郎』の広田先生のように純理的、説明的にはあったが、文明のパラドックスを描いてみせた。あくまでも理屈として、論理として筋道を通したところに特徴があった。

二 『河童』と比較する

この『猫』の未来記に似たものを、日本の近代文学史上に求めると、その一つは芥川竜之介が自殺の年に発表した『河童』であろう。漱石の出発点と、芥川の帰着点が同じ未来記というのも面白い。

もっとも『河童』は、吉田精一の言うとおり「無何有郷の文学」で、純粹に未来記とは言えないかも知れない。しかし理想郷の描写とも言えない、いわば陰鬱なるガリバー旅行記であって、ただ想像力を展開させて社会全体を描いたという点で、『猫』と接点あるものと見たいのである。

『或阿呆の一生』は一見韜晦しているようにみえて、その実きびしい告白の精神に貫かれている」と駒尺喜美(注1)はいったが、『河童』

についても全く同様の事が言えるだろう。

『猫』の自殺クラブに当たるのは、『河童』では出生拒否で、雌の河童の腹の子は言う、「僕は生まれたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大変です。その上僕は河童的存在を悪いと信じていますから。」と。これは芥川自身の発狂の恐怖と自己の性的無軌道ぶりへの慚愧の現れだろう。流行作家以後の芥川は性的には乱れていたようだから。

詩人の自殺も出てくるが、これは自身の自殺の予行演習である。

調査が棍棒で殴り殺す代わりにここでは、解雇した職工にガスを嗅がせて殺し、食肉にして食ってしまう。ナチスの先例のようでもあるが、当時の資本家と地主による、労働者階級圧殺の風刺だろう。

『猫』における御上の権威失墜に当たるものは、ここでは警官による「演奏禁止」と民衆の反発であろうか。これも無論、当時の世相たる階級闘争・プロレタリア文学芸術運動の風刺で、この階級闘争の実際は漱石の知り得ぬ当代の事件だった。

「遺伝的義勇隊を募る！ 健全なる男女の河童よ！」

悪遺伝を撲滅するために 不健全なる男女の河童と結婚せよ！」

このポスタアは、たんに血を平均化することで悪遺伝を撲滅するというのは科学の方法としては間違いだから、共産主義の社会平均化思想を、どうもおかしいと風刺したのだろう。これも漱石の知らぬところだった。（漱石では皆が孔子になることで平均化される思想はあったが、社会的圧力によって無理やり平均化してしまう思想はなかった。有っても、社会周知のものではなかった。）

ただし芥川には、この義勇隊の方が、「一本の鉄道を奪うために互いに殺し合う」人間の義勇隊よりもずっと高尚ではないか、という戦争批判がある。漱石には時によって戦争批判は無くなった。猫に「混成猫旅団を組織して露西亜兵を引っ搔いてやりたい」といわせている。大正の作家芥川の特典だろう。

結婚の不可能にあたるものは、『河童』では雌が雄を追うという男女間の現実の風刺、「親子夫婦兄弟などというのはことごとく互いに苦しみ合うことを唯一の楽しみにして暮らしているのです。」という家族制度の批判、「あすこにある玉子焼きはなんとと言っても、恋愛などよりも衛生的だからね。」という家庭の幸福への羨望などとしてあり、どれも芥川自身の現実の実感的苦しさや悔恨の表白であって、漱石のように純理的な論理によって、二つの個性の闘争による結婚の不成立を言うのではなかった。

芸術の不成立、英雄出現せずでは、ろばの脳髓と紙とインクを入れると、大量の本が滝のように流れ落ちるといふ書籍製造会社の工場風景が、痛烈な皮肉だ。いわゆる円本から本の大量生産、大量消費社会の到来を予想してこれを風刺したが、自分の作る芸術もそうだとは思っていない。むしろ、自分の特異性を信じていたのであろう、芸術家の強烈なコンプレックスや、死後の名声に恋々たるを肯定する。「近代教」が人々の信仰を集め、作家・芸術家がその偶像となると指摘しながら。つまり皮肉な眼はありながら、芸術の永遠性、芸術的英雄の不滅をまだまだ甘く信じている。漱石のように未来社会の芸術そのもの、英雄そのものの存在に懐疑的ではなかった。

漱石のよく言う神経衰弱も、『河童』では、やがて自殺する詩人自身が、詩人だけが、狂気にとらわれ、神経衰弱に陥いるのだった。

先の駒尺喜美は、漱石の到達点と芥川の出発点との関係をこう要約している。それをまた要約すると、

1 人間にとって、エゴイズムが重要な問題だと漱石はさし示した。芥川はそれを受けとめて中心テーマに据えた。

2 漱石のエゴイズム認識とは、人間は善であると同時に悪であり、関係において変わる、というので、芥川はそれを継承した。

面白い。が、エゴイズムと言うから狭くなるし、最初からいけないもののようにも聞こえる。問題が善悪だけになってしまふ。ぼく思うに、出発点も到達点もない、漱石の考えた事は、個性の発達は個人のためにも社会のためにも必要不可欠のものが、そのことがその個人を不幸にし、社会を解体するというジレンマの発見だった。芥川はそれを考えていない。半分しか考えていない。

漱石が時代を超えてやがてそうなる社会の姿を、原理として論理的に考えているのに、芥川は自己の実感や告白を通して、現在の社会を皮肉ったり、風刺したりした。そこにそれぞれ、自分自身の苦しみや悩みを公明正大に越えようとした時代の個性と、それに執着した時代の個性が、表現された。

漱石は明治三十八年から大正五年までの十二年間小説を書き、その後を継ぐように芥川が大正五年から昭和二年までの十二年間小説を書いた。それぞれの文学活動を通して漱石は明治の精神を、芥川は形式や文体に凝りながら大正の美学を作り上げた。『吾輩は猫である』の未

来記と『河童』は、この明治の精神と大正の美学の表れと言えるであろう。

三 文明批評と細君

とはいっても、漱石が陰湿でなかったと言うのではない。彼が徹頭徹尾常に公明正大な論理の人だったと言っているわけではない。彼は論理の筋道を通して文明批評を展開しながらも、その心の奥にひっかかっていたのは、細君を——広く言って女性を——どう扱うかということであった。

あの「吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。」という結論の後、続けて独仙は言う、

「それだから西洋の文明などはちよつといいようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋じゃ昔から心の修行をした。その方が正しいのさ。見給え個性発展の結果みんな神経衰弱を起して、始末がつかなくなった時、王者の民蕩々たりという句の価値を始めて発見するから。」

個性発展が神経衰弱を起す、は、これもあの「現代日本の開化」で、機械的に西洋の真似をする日本の開化は、内発的でない、外発的である、だから神経衰弱にかからざるを得ない、と言ったのを思い出す。

『猫』での開化そのものが神経衰弱を起す、から、日本の特殊事情が神経衰弱を起す、へと和らげたので、元はもつときつかった。

東洋の修行がその緩和剤となるとは、漱石に持ち続けられた考えだ

が、『猫』では自信を持って主張されてはいない。独仙は、東風とは対照的ながらやはりトリックスターだったから。

さて、『現代日本の開化』で、結びの前に、真相は知らない方が幸福だという例に、男が女を疑うモーパッサンの小説の例が出てくる。そのように、漱石にとって神経衰弱を起こさせるものの一つは、女の存在だったろう。独仙の話の後は例の如く主人によって「女のわるい事」の総ざらえが始まる。

『猫』は、それも西洋の昔のこういう本にはこうあると、本を盾に女の悪口を言い続けた小説で、ここでは、女の中でも細君に限って見てもみよう。

初めは、何処にでもいる細君一般だった。『猫』の一回に「畳で爪を磨いたら細君が非常に怒って」とある。

だが二回で、タカジャスターゼの効能をめぐって主人を「あなたはほんとに厭きっぽい」と批評し、主人が毎朝含嗽をやる時「鵜鳥が絞め殺されるような声を出す」癖を、以前はなかった、と証言している。細君は飼猫と競争するように主人を批評し、しかもその批評歴は当然ながら猫よりも古い。

同じ二回に、歌舞伎座の悪寒。細君と一緒に出かけたくない主人が、仮病まがいの発作を起こす笑い話がある。中に「あなたはあんまりだと泣くような声を出す」「あなた位冷酷な人はありはしないと非常な権幕なんで」などとあって、この夫婦の特性が発揮され始めた。

四回では、日向ぼつこの最中、細君の脳天に禿を見つけた主人との間で小ぜりあいが始まる、「不具だ」「不具なら、なぜ御貰いになった

のです。御自分が好きで貰って置いて不具だなんて」と。

さて細君一般から、どうしたらほかならぬ苦沙弥の細君が造型できようか。それには何か非日常な事件が起こり、夫婦の間に利害の対立、摩擦、亀裂が露呈する必要がある。それが上の歌舞伎座見物であり、下の盗難事件であった。

五回、泥棒が入った翌朝、盗難告訴を書くとして、細君の帯が六円、羽織が十五円、夫の足袋が二十七銭に始まり、山の芋の値段は知りません、けれど十二円五十銭もしてたまるもんですか、という細君に、「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。まるで論理に合わない。それだから貴様はおタンチン・パレオロガスだというんだ」。

「あなたはよっぽど私を馬鹿にしていらっしゃるのね。きつと人が英語を知らないと思つて悪口を仰つたんだよ。」

夫は論理的にのみ考えようとし、妻はそう考える夫には自分に対する愛情が欠けていると感じてしまう。それは、知を挟んで日本の夫婦の間にあった一般的な行き違いであると共に、特にこの夫婦つまり漱石夫婦の問題であった。『道草』の健三とその細君に似てきたといつてもいい。

それと文明批評との関係。細君を書いている時には文明批評をしていない事である。それにはこの『猫』第六回を子細に検討したらいいだろう。「こう暑くては猫といえども遣り切れない。」にはじまり、「人間は贅沢なものだ。」衣食から頭の刈り方まで新奇な流行に憂き身を窺す、その閑人がよると障わると多忙だ多忙だと触れ廻わり、こせついている、と人間一般を批評し、観察しがいのある迷亭来るを待ち望む。

と、お誂えどおり迷亭が来て、細君相手に話し出す、屋根の瓦で卵のフライをしたが失敗した、この気候はハーキュリスの牛と同じで後戻りをする、西洋種の話をしていると、昼寝から目をさました主人も出てくる、帽子の話、鉢の話、笹蕎麦の食べ方に迷亭は駄弁を弄するが、細君の受け答えも活発である。

「あら希臘の御話しなの？そんなら、そう仰っしゃればいいのに」と細君は希臘という国名だけは心得ている。「だってハーキュリスじゃありませんか」「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らないと思いました。それでその男がどうしたんで——」「その男がね奥さん見たように眠くなってぐうぐう寐ている——」「あらいやだ」

「まあ奇麗だ事。大変目が細かくって柔らかいんですね」と細君は頻に撫で廻わす。「奥さんこの帽子は重宝ですよ、どうでも言う事を聞きますからね」と拳骨をかためてパナマ帽の横ッ腹をぽかりと張り付けると、(中略)細君は無論の事心配そうに「折角見事な帽子をもし壊わしでもしちやあ大変ですから、もう好い加減になすつたら宜う御座んしょう」と注意をする。

「あなたも、あんな帽子を御買いになったら、いいでしょう」と暫くして細君は主人に勧めかけた。(中略)細君はパナマの値段を知らないものだから「これになさいよ、ねえ、あなた」と頻りに主人に勧告している。

「おい俺にもちよつと覽せろ」というと細君は鉢を顔へ押し付けたまま「実に奇麗です事、裸体の美人ですね」といつてなかなか離さ

ない。「おいちよつと御見せというのに」「まあ待っていらつしやいよ。美しい髪ですね。腰までありますよ。少し仰向いて恐ろしい脊の高い女だ事、しかし美人ですね」「おい御見せといったら、大抵に見せるがいい」と主人は大に急ぎ込んで細君に食って掛る。「へえ御待遠さま、たんと御覽遊ばせ」

そこへ寒月がきて、博士論文のために毎地球を磨っている、金田にも二、三日前に事情を話してきたと言う、

すると今まで三人の談話を分からぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さんは家族中残らず、先月から大磯へ行っているしやるじゃありませんか」と不審そうに尋ねる。

これを聞いた迷亭が「先月大磯へ行ったものに両三日東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる霊の交換だね。」と嬉しがる。続けて、「相思の情の切な時にはよくそういう現象が起るものだ。ちよつと聞くと夢のようだが、夢にしても現実より慥かな夢だ。奥さんのように別に思いも思われもしない苦沙弥君の所へ片付いて生涯恋の何物たるを御解しにならん方には、御不審も尤だが——」「あら何を証拠にそんな事を仰しやるの。随分輕蔑なさるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付ける。「君だって恋煩いなんかした事はなさそうじゃないか」と主人も正面から細君に助太刀をする。「そりや僕の艶聞などは、」

と、迷亭の失恋談、蛸壺峠の一軒屋で蛇飯を食う話が始まる。そこでも細君は「だまって聴いていらつしやいよ。面白いから」と主人をたしなめ、「もう廢しになさいよ、胸が悪くって御飯も何もたべられやし

ない」と愚痴をいぼす。さらに迷亭の口から老梅の失恋談が話され、「考えると女は罪な者だよ」というと、主人が、本当にそうだ。ミュッセを読んだらこんな事をいつていた、羽より、塵より、「風より軽い者は女である」「女なんか仕方がない」と力む、

これを承った細君は承知しない。「女の軽いのがいけないと仰しゃるけれども、男の重いんだって好い事はないでしょう」「重いた、どんな事だ」「重いというな重い事ですわ、あなたのようなのです」「俺がなんで重い」「重いじゃありませんか」と妙な議論が始まる。

男が女の体制順応を軽いと責めると、女は男の体制不順応を重いと批判する。軽い男も多い世の中だから、この応酬自体、漱石夫婦に近づいた苦沙弥夫婦の特殊性を発揮したものだ。

これまで見てきたように、多少庶民的ながら、細君がじつによく口を出すようになり、この回などは太平の逸民グループに加わった観がある。水を得た魚のようだ。しかしこれが頂点で、細君は以後は『猫』の中心から急速に後退していく。それは、どうしてか。

先の続きをもう少し見ると、迷亭が、昔の女が必ずしも今の女より品行がいいとは限らない例として、昔は女の子はよしかな、と、女の子を唐茄子のように籠へ入れて天秤棒で担いで売って歩いた、そして後ろに担いだ方は、目がないから、安くして置くと言ったという話をする、寒月が、今の女学生は自分で自分を売り歩いているから、八百屋お余りを雇って、女の子はよしか、なんて委託販売をやる必要がない、人間に独立心が発達した結果で、喜ばしい現象だと言う。すると迷亭が、なるほど方今の女生徒、令嬢の自尊自信はすばらしい、始

めて女権を伸張した希臘の産婆の草分け Agnodice を思い出すと言つてその話をする、

「よく色々な事を知っていらっしゃるのね、感心ねえ」「ええ大概の事は知っていますよ。知らないのは自分の馬鹿な事位なものです。

しかしそれも薄々は知ってます」「ホホホ面白い事ばかり——」と細君相形を崩して笑っていると、格子戸のベルが相変わらず着けた時と同じような音を出して鳴る。「おやまた御客様だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入れ違いに座敷へ這入って来たものは誰かと思つたら御存じの越智東風君であつた。

この細君と東風の交替は重要だと思ふ。東風はまだ二度目の来訪で、馴染みが薄いから細君は引き下がったとも見られるが、新体詩人の東風が加わる事で話題が変わる。とりとめない閑談から当代の文学の批評、文明批評中の文学批評に変わったのである。

批評の組板に上がるのは、まず寒月作の俳劇、できたての虚子の俳句を中心に、それを宣伝するような、おちゃらかすような、しかも俳句などは亡国の音と言つた上田敏への当てこすりもたつぷり含んだもの。次には東風作の新体詩「倦んじて薫ずる香裏に君の」で、これは竹森天雄（注2）の言う通り山本健吉も指摘した、当時の新体詩に対する漱石の飽き足りない気持ちの引き起こした批評であらう。竹森もうまく元の詩を捜し出せていないが。またこれも新体詩好きの上田敏への批評でもあつた。三つ目は苦沙弥作の短文「大和魂」で、これも竹森によると、談話「戦後文界の趨勢」（注3）で漱石はこう言っている、——これまでの日本は、文学では西洋に負けていた、誇るに足る

ものが一つも無かったから。しかし日露戦争の連戦連勝の結果、日本国民の精神上にも大なる影響が生じ得ると思う。日本は日本としての特性を持って今の世の中に生存しているので、日本人としての特性を忘れてはならん。およそ物を判断するには、自己が標準となる、西洋の批評家が言った事をそのまま鵜呑みにするのは、随分馬鹿氣な話だ。人間には自信自覚がなければならぬ、「大和魂」も今日までは苦し紛れの恐怖の叫びであったが、自信自覚の大なる叫びと変化して来た。向こうも人なら吾も人だ、文学でも、日本はどこまでも日本で、日本人には日本人の特性がある、日本絵画が特徴を発揮したように、「俳句の如きものに付いても考え直す余地は十分にあるかも知れぬ」と言っている。—— ぼく(米田)思うに、これは後の漱石の「私の個人主義」の原型とも言えるべき論で、基本的には少しも変わっていない。漱石はナシヨナリストで、その彼の日本人観、或いは明治の精神を見る思いがした。当然、もつと西洋に学べという上田敏とは対立した。もつとも『猫』中の「大和魂」は、賛美とともにからかい、批評でもあって、漱石の言葉は両刃の剣であったが。

以上のように俳劇、新体詩、大和魂の三つとも、同僚でライバルでもあった上田敏攻撃が根にある文学批評だった。

公明な文明批評と執拗な個人攻撃が別物でなかった。漱石は私怨を公明な批評に引き上げる事の出来る人だった。

こうした文明批評が前面に出ると、苦沙弥の細君は引っ込んでしまふ。文明批評と細君は綱引きになっている。これまでも、活動紙幣、活動切手といった実業家への風刺、土地は大空同様自然のもので、個

人の占有物ではないという論、猫と鼠の戦争——東郷大将のパロディなど文明批評はあったが、そういう時はいずれも細君は出てこない。上に見たように夏日閑談中細君大活躍の後、猫の運動、銭湯風景、国語問題、落雲館戦争、瘋癲院の内に居るのと外に居るのとどっちが狂人か、艶書事件そして未来記と、文明批評が目白押しとなると細君は殆ど出ないか、出ても刺身のつま程度ちらつと出るだけで、生彩ある描写は影を潜めてしまふ。しかし居ないのではない。襖の向こうの居間に居てこちらの話を聴いている。

だから細君(及び細君に近い女性)は後に大いに描かれる必要があった、『道草』に。その前に『彼岸過迄』や『行人』に。その後に『明暗』に。

△注▽

(1) 駒尺喜美「漱石と芥川」(『国文学』昭和四五年十一月、『日本文学資料新集 芥川竜之介 作家とその時代』一九八七年十二月、有精堂所収)

(2) 竹盛天雄『漱石 文学の端緒』(一九九一年六月、筑摩書房)

(3) 夏目漱石「戦後文界の趨勢」(『新小説』明治三八年八月、『漱石全集』昭和四二年版第十六卷岩波書店所収)

なお、本文中に引用した作品の部分は、『吾輩は猫である』は岩波文庫一九九〇年版、『河童』は同一九六九年版によった。